〔論文〕

エリーザベト・ランゲッサーの短篇集『トルソ』について

深堀建二郎

Elisabeth Langgässers Kurzgeschichtenband „Der Torso“

Kenjirou Fukahori

Elisabeth Langgässer, die als Halbjüdin in der ganzen Zeit des Dritten Reichs in Berlin lebte und mit ihrem arischen Mann und drei Töchtern unter wiederholten Luftangriffen sehr litt, gab kurz nach dem Weltkrieg 18 Kurzgeschichten als „Der Torso“ heraus, die von zwei Gedichten eingerahmt sind.

In diesem Kurzgeschichtenband „Der Torso“ ist „alles drin: der Schrecken, das Entsetzen, der Wahnsinn und die Groteske, aber auch die Unschuld...und die Treue und Zärtlichkeit...“ Im vorliegenden Aufsatz habe ich diese 18 Geschichten und zwei Gedichte zunächst genau interpretiert. Und dann habe ich die Frage untersucht, ob dieser Band als Ganzes eine musikalische Komposition hat oder nicht, weil Langgässer in einem ihrer Briefe seinen „Aufbau musikalisch, nicht logisch, geschweige chronologisch“ auffasst.

Als Ergebnis hat sich ergeben, dass man diesen Band nicht genau als musikalisch bezeichnen kann, er jedoch als Ganzes unter einem einheitlichen Gesichtspunkt beschreiben werden kann, d.h. mit christlichem Glauben durchdrungen ist, zu dem sich Elisabeth Langgässer lebenslang bekannt hat.

キーワード　ドイツ的ショート・ストーリー　ナチス時代を生きて

はじめに

1933年1月30日にヒットラーが政権を握って以来、エリーザベト・ランゲッサー（1899—1950）は筆舌に尽くしがたい辛酸をなめて来た。この頃の彼女の書簡の随所にそれを読み取ることができる。1935年にいわゆる「アーリア人」のヴィルヘルム・ホフマンと結婚したが、同年９月のいわゆる「ニュルンベルク法」によって、彼女自身が、４人の祖父母のうち父方の祖父母が「完全ユダヤ人」（Volljude）ということで、「半ユダヤ人」（Halbjüdin）とし

て「第一級混血児」（Mischling Ⅰ）との判定を受け、執筆禁止処分となった。しかし、この関連でのランゲッサーの心労は、これに留まるものではなかった。

ランゲッサーには、ホフマンとの正式な結婚の前に、ある「完全ユダヤ人」の科学者との間にもうけた娘コルデーリア（1929年生れ）がいた。コルデーリアのユダヤ人率は四分の三で、「ニュルンベルク法」によれば「完全ユダヤ人」ということになる。以後、コルデーリアの成長につれて、ナチスのユダヤ人迫害の波がランゲッサーの一家にひたひたと打ち寄せてき、ついには、コルデーリアはベルリンのイラン街にある「ユダヤ人病院」に収容された後、そこから1944年の３月にチェコの「テレージエンシュタット強制収容所」へ送られ、最後には、後日に判明したことだが、あの「絶滅収容所アウシュヴィッツ」へ移送された。幸いにもコルデーリアはホロコーストを生き延びることができたが、この間のランゲッサーの深い心痛は、書簡のあちこちから窺うことができる。

また、ランゲッサーは正式な結婚によって三人の娘をもうけた。この娘たちは「第二級混血児」（Mischling Ⅱ）としてドイツ人として育てることができたが、それぞれ1938年、40年、42年生まれなので、39年から45年までの足掛け6年にわたる第二次大戦中の子育ての苦労は多大のものがあったことも書簡に見える。あまつさえ、43年頃からの連合軍によるベルリン空襲である。戦時下の空襲の被害や強制労働や窮乏生活は、ランゲッサーに限らず国民すべての苦しみであるが、ランゲッサーには「多発性硬化症」が二度にわたって発症するという事態が加わったのであった。ランゲッサーは結局はこの病気の犠牲となったのである。

このような状況の中でもランゲッサーは、彼女の名実ともなる代表作の長編小説、結婚のためにカトリックの洗礼を受けたユダヤ人の物語『消えない印』[1)] を書き続け、1947年に刊行して、ドイツ文学界で多大なる反響を呼んだ。

この主著を書き継ぎながら、同時に1946年から47年にかけてランゲッサーは、ワイマール共和国、ナチ時代、そして第二次大戦直後を生きた人々の悲惨と苦悩の姿を18の短篇と２つの詩にまとめ、『トルソ』（1947年）という題

名で刊行した。[2]「トルソ」とは「首と手足を欠いた彫像」の意だが、この表題からしてすでにこの時代の人々のトルソ的状態、明確な個性を表わす顔と、動作や振舞いの源を表象させる手足をもぎ取られた状態を示唆している。ランゲッサーのこの頃の書簡には、この『トルソ』についての自注的解説が散見される。ランゲッサーは最初はこの本に『座標』という題名を与えたかったらしく、この言葉について次のように述べている。

「この言葉は私の気持ちにとって数学的に厳密な、素っ気なく感傷性のない雰囲気を表わしており、同時にとてつもなく深い運命的な瞬間に、この交差する二つの線をパッときらめかせる形而上的座標系を表現してもいるのです」[3]

この引用部分でランゲッサーは、二つの運命の一瞬の交差を形而上的深さをもって表現すること、これこそが「ドイツ的形式の」[4] 短篇であって、「アメリカ流のショート・ストーリー」[5] ではないと言いたいのである。

また別の個所では次のように書いている。

「これは実に残酷な短篇を集めたもので、個々の作品をそれ自体としてバラバラに分けてはいけません。つまり、その構成は論理的ではなく、ましてや編年体でもなく、音楽的だからです。私はこの作品の中にはすべてが、つまり、恐怖が、驚愕が、狂気が、グロテスクさが、しかしまた、小さな女の子が自分の『初聖体の日』に示す無邪気さが、そして『忠実なアンティゴネー』の頑なに守り通す忠誠心と優しさがあると思っていますが、これらの短篇は決してルポルタージュではないのです」[6]

この本のすべての短篇を統一的な視点で観察し、解釈しなければならない、それぞれの短篇が、音楽で言えば各小節を形成していて、一篇だけ読んでも、完全な意味にはたどり着けず、この時代を生きた人々の悲惨と苦悩をトータルに理解することはできない、というのである。

以下本論では、従来は全篇がまとめて論じられることがほとんど無かった短篇集『トルソ』について、全18篇の作品を並べられている順序で詳細に解読し、考察の対象とすることを主眼とし、併せてそれらが一体として、ランゲッサー言うところの「音楽的構成」の達成となっているかどうかも検討したい。

1．Ballade vom Menschen dieser Zeit

この『トルソ』の劈頭に置かれた詩は、第二次大戦の終了間際と直後のナチス・ドイツのさまざまな映像に、モーゼ、アキレス、ヘクトールといった古代ユダヤ・ギリシアの形象が織り交ぜられた詩行の最後に、ファティマのマリアとその子イエスが姿を現わす。聖マリアのとりなしに対してイエスは言う、「懇願はお止めなさい、私はもう彼らを裁くのですから」（313）と。

このイエスの宣言をもって、18の物語の幕が切って落とされる。[7)]

2．Der Torso

短篇群の嚆矢は、第二次大戦後の人間のトルソ的な状況を寓話的に描いている。物語は三人の男たちが丸太小屋から出てくる場面から始まっているが、その男たちの一人はアメリカ人らしきジョニー、二人目はユダヤらしきハバクク、最後の一人はただ日本人としか名付けられていない。この人物設定自体がすでに寓話的な、現実にはあり得ないような組み合わせから成り立っている。「この最後のひどい破局」という表現や、内臓にこうむったハバククの損害がただ「爆風による」（314）と表現されていることのみが戦争を暗示するばかりである。この三人が、「進歩的な人間であり、それが今や剥き出しの端緒に投げ返されている」（316）ジョニーの発明品である「犂の水平刃」（315）を使って土地を耕す作業のありさまが、この作品のすべてであり、この作業の途中で三人は石膏のトルソを掘り出すことになる。

ランゲッサーはこの作品で、この三人の、ひいては第二次大戦後の全人類のトルソ的状況、すなわち手足をもぎ取られ、確固たる意思を表す顔を失った人間、「剥き出しの端緒」に投げ出された人間の状態を暗示的に描いた。

そして、この短篇を全篇の冒頭に配置することによって、ランゲッサーは

最後の審判を受けた人類の状況を暗示し、その状況の淵源である過去へ、ドイツの悲劇へと物語を遡っていくのである。[8)]

3．Das Stilleben

とある仕立て屋のアトリエ。一体の胸像がひっそりと立っている。その前に置かれた腰掛の上には、イタリア製の小皿、破り開けられた煙草とマッチ箱、腕輪、光沢のある陶製の皿、やぎ皮の手袋などが載せられ、周りの床には女性用サンダル、ボルドーワインの空瓶が転がっている。これらの贅沢な品々が散らばる部屋には、鉛の縁取りで区切られたガラス窓があり、淡い朝の陽光がそこから射し込んでいる。

このような細かい描写に続いて、この洋服仕立て用の胸像がこの部屋の「あまりにひっそりと虚しい」(319) がために、ゆっくりと回転し始める。このこと自体はあり得ないことだが、物語に人物が登場せず、部屋の様子と事物の描写に満たされているので、いわば物たちが擬人化されている印象が全篇を領しており、この胸像の回転があり得ないこととは思われない。胸像は一日中回転し、日没時にやっと回転を止めた。「あたりは冷え冷えとしてき、暗くなってきた…色も消え去り、物の形も無くなった―そしてついに夜となった」(320) これが最後から二番目の文で、最末尾は「この日は1941年６月22日だった」(同) でこの作品は終わっている。とはつまり、この日が歴史的にどういう日か知っていなければ、この不思議な作品の解釈はできないことになる。

この日は、第二次世界大戦中でナチス・ドイツが対ソ連への攻撃を開始した日である。周知のように、それまでドイツは1938年３月にオーストリアを、翌年3月にはチェコスロヴァキアを併合し、同年９月１日ポーランドに侵攻した。これに英仏が応じ、第二次世界大戦の幕が切って落とされた。翌40年６月ドイツはパリに無血入城を果し、41年に入って、ユーゴ、ギリシアに進撃したのち、運命の６月22日を迎えることになるのである。対ソ連戦は緒戦のうちこそ勝利を収めて、戦いは有利に進展したが、冬の到来とともに戦況は膠着し、長期戦に突入することとなった。これがナチス・ドイツ敗北の序曲となり、何千万という人間の死をもたらす端緒ともなった。

この作品は、「あたりは冷え冷えとしてき、…そしてついに夜となった」という文章によって、悲惨な戦争という本短篇集の主題の一つを象徴的に提示しえているのである。[9)]

4．Saisonbeginn

とある村の入り口にある標識を立てるために、労働者たちがやってくるところから物語が始まる。この標識の内容がいったい何であるのかは、作品の最終行になってやっと開示される。この標識文に対する興味によって、読者は最後まで引っ張られていくが、そこに至るまで語り手は、村の晩春の景色を叙し、労働者たちが標識を立てる場所の選択の逐一を報告し、そしてやっとそれを立てる作業となり、村のさまざまな人々が見物人として訪れ、標識を見てさまざまな反応を見せ、太陽までがその陽光で標識の文字をなぞり、最後には、並んで立っている十字架象の「瀕死のキリスト」までも「最後の力を振り絞って」(323)、その標識の文字を受け入れようとする様子を語るのである。

ここまで読者は興味を充足させることを引き伸ばされるので、物語の最終行におかれた標識文「In diesem Kurort sind Juden unerwünscht.（当保養地ではユダヤ人はお断りします)」(323) を読んで、ようやく満足し、さらに物語の最初に戻って、今度は作業を眺める村人の反応などの細部を克明に追究しようと思うのである。

この作品では、ナチス・ドイツのユダヤ人迫害政策が500万人以上の人々の大量虐殺、いわゆるホロコーストへと展開していく過程の端緒的事象が語られている。このような立て札は、恐らくドイツ全土で普通に見られた現象だっただろう。そして、当時の大多数の人々がこの立て札に示す反応も、この作品に描かれた通りであったろう。

> 「樵仕事や野良仕事帰りの男たちの反応は、さまざまだった。笑っている者もあれば、何も言わずにただ頭を振る者もいた。男たちの多くはそれに心を動かされず、賛意も拒絶も示さなかった。事態がたとえどのように進展しようとどうでも良かったのだ」(323)

恐らくランゲッサーにはこの文章によって、ホロコースト全体に対する大多数のドイツ人の反応を象徴的に示そうとする意図があったのであり、その意味でこの作品は、ナチス・ドイツの悪名高いホロコースト記述の序曲をなす短篇と認めていいだろう。[10)]

5．Die Sippe auf dem Berg und im Tal

語り手の「私」は女性で、彼女は1943年に連合軍の空襲を逃れて、ベルリンからヘッセン州の小都市アメーネブルクへ子どもたちを疎開させることになる。そこは夫の父親の出身地で、そこにはその義父の幼い頃の写真が残っていて、その写真こそ「私」に先ずはそのアメーネブルクの義父の所に行く決心をさせた密かな理由だった。

その写真の幼い義父はどこから見ても貴族然としていて、不動の意志を宿した鋭くて、澄み切った冷静な目をもっており、この眼差しは当時すでに人の心を見通すようで、この眼差しを避けることはできなかったらしい。この町で義父の先祖の墓や従兄たちの家を訪問したが、この場所にはどうも子どもたちともども滞在することが難しそうな気がして、やはりフルダ近傍に住む義父の従弟のカール・ヨーゼフ神父の所に立ち寄った。神父は昔の貴族の館を司祭館として用いており、「私」はそこにロマンチックな滞在をするという密かな願いをもっていたのだ。事実、「私」はそこで夢のような秋の一日を過ごすこととなった。かつて世界中を経巡り、労働司祭として働いた過去をもつ神父と、ワインを飲みながら罪、希望、未来、贖罪、最後の審判などといったさまざまなことを語り合った。そんな対話の中で、「私」は突然、義父の幼時の写真と目の前の神父との類似性に気づいた。神父の眼差しと貴族のような態度は、まさにあの写真の子どものものだと。

それから「私」は神父の示唆によって、フルダ近郊で農場と食料品店を経営している従兄のアルバン・クラインの所に行く。アルバンは人が何を言っても「それは私の責任だ」(328) と言う。何故かと彼の奥さんに訊くと、彼女は「1932年に誤った選択をしたからだ」(329) と答える。ちょうどその時、空襲の飛行機が飛来してきたが、それに向かって彼は「責任は私だけにある」

（329）と言いながら両腕を曲げ、こぶしで胸を連打するのであった。ここでも、1932年の選択とは何かを知る必要がある。それは、1932年７月31日の国会選挙でヒットラー・ナチスが第一党になった事実を指しており、この作品は、戦時中の疎開の様子を語りながら、ヒットラーを選択してしまったことを深く後悔し、それを断固として表明し続ける一人の人間の鮮明にして強烈なるイメージを描いている。[11)]

６．Verlagert

この作品では、激しくなった空襲を避け、疎開先のリーゼンゲビルゲ、オーバーシュレージエン、ライヒェンバッハに送られることになった擬人化された三つのトランクに仮託して、それらのトランクの所有者とその中味との辿る運命が語られる。その際、この物語の全幅を領しているのは、第二次大戦中のナチス・ドイツの諸状況と、そこに住まう人々を見舞うさまざまな運命である。

リーゼンゲビルゲへ疎開する「Springinsfeld」（330）というあだ名のトランクには、「歓喜力行団」（333）の船旅で知り合った一組の男女の、エーリカという女性の花嫁衣裳が入っていて、それらは結局途中で略奪され、エーリカは淋病で死んだことが暗示される。疎開地ライヒェンバッハに向かったトランクは文部省のある高官のもので、その中にはさまざまな文化財が入っていたが、ズデーテン地方から最後のドイツ人たちが逃亡してきた際にこじ開けられ、次いで投下機雷によって中味は雲散霧消してしまう。オーバーシュレージエン行きのトランクの持ち主の老夫婦も、ベルリンのソ連軍包囲の直後に殺害されたことが暗示される。しかし、この夫婦のトランクだけは無事にオーバーシュレージエンに住む兄弟のカバシュケ神父のもとに到着し、それが開けられると、中からキリストの身体が黒檀で作られた銀の十字架が見つかる。カトリックの徒ランゲッサーはこの十字架の無事な到着によって、救いの希望を暗示している。[12)]

７．Untergetaucht

この作品は、ユダヤ人であるかつての同級生を匿うドイツ人女性の語る、

本来なら手に汗握る危険に満ちた物語である。作者はこのような状況の一面を匿う側のドイツ人の視点から浮き彫りにしているのだが、その際に作者が採る方法はこの短編集『トルソ』でもいくつか見られるのだが、とある駅の酒場で本来の物語を語るドイツ女性の話に、たまたま同じ酒場にいた元来の語り手である「私」が聞き耳を立てるという構成になっていることである。このような作品の構成が、話の切実さを相対化することにもなる。つまり、元来の語り手の「私」が最末尾で本来の物語に介入するのであるが、これは一種の枠物語であり、私見によれば、古今東西の枠物語が本来の物語に事実らしさよりも、むしろ物語らしさの特徴を与えることになる、ということにこの相対化は起因しているのではないだろうか。

一般にユダヤ人を匿う物語は、匿う側と匿われる側の息詰まる心理的葛藤が話の中心になるのだろうが、そして本作品においてもそうなるはずのものだったのだろうが、この枠物語的要素、また話を語るドイツ人女性の太った体型とその少しく楽観的な語り口、さらにはその家に飼われた「すぐにすべてを口真似できる」(336) オウムの存在によって、この短篇はいくぶんとも軽やかな雰囲気をもつことになった。しかし、オウムはやがてユダヤ女性の名前を連呼するようになり、訪問客があると、急いで布を被せねばならない。ついには、オウムを殺すかユダヤ女性を追い出すかという選択を迫られることになる。夫婦はオウムに罪は無いし、できたらユダヤ女性も助けてやりたいとは思っているらしいのだが、あるとき、とうとうゲシュタポがやって来て、「ここにゴルトマンという名のユダヤ女性が隠れているか」と訊く。この切羽詰った瞬間にユダヤ女性が進み出て、いとも冷静な声で「はい、私です。私は庭を通って勝手口からこの家に忍び込んだのです、この家は空家だと思ったものですから」(340) と言った。彼女は即座に連行されて行ったが、堅く口を閉ざしていたので、匿ったドイツ女性は罪を免れた。

作者はこの作品によって、猛威を振るうようになるホロコースト現象の一側面と、それに対する善意の市民の援助行為の不徹底さと困難さを、本来の物語の語り手の婦人にたくみに語らしめることに成功している。[13)]

8．Lydia

この短篇も戦争末期の物語である。話の中心はメイドとして一般家庭に労働徴用されたウクライナ出身の若く美しい女性リュディアである。ここでは語り手の「私」が語る戦争末期の平均的なドイツ人の家庭に労働力として狩り出された外国人の姿と、それに対するドイツ人の関わり合いを描いている。

ナチス・ドイツにおける外国人労働者の動員は、1942年３月に労働配置総監に任ぜられたテューリンゲンの大管区指導者（Gauleiter）ザウケルが大規模に推進し、以後2年半にソ連からだけでも250万人の民間人労働者が強制連行された。その内ロシア人女性20万人以上がメイドとして一般家庭に入れられたという。[14] 本短篇の実質的な主人公リュディアもその中の一人で、彼女はウクライナはマリウポリの大学で物理学を専攻している学生で、語り手の「私」の友達の家でジャガイモの皮むき作業をさせられている。彼女は郷愁に駆られて夜通し泣きとおしたり、何回も脱走したりしたが、1945年の1月になってドイツ人たちの間でロシア兵がベルリンに侵攻してくるという噂が流れ始めるや、ジャガイモの皮むき作業の最中に急に外に出て行って、地面に耳を当て、幸せにはちきれそうな顔をした。何を聞いたのかと尋ねられて、彼女は「それが何かはうまく言えないのだけど、ママ（と彼女は私の友達のことを呼んだ)、でも感じるの、地面が打電してるの」(344) と自分の専門の用語で答えるのだった。事態が終末に近づくと、友達の家の広々とした台所にだんだんと大勢の人が集まってきて、その真中にはいつも一言も喋らずにジャガイモやりんごの皮をむいているリュディアがいるのだった。ラジオで空襲警報が発せられると、まぶたを上げた彼女の顔は朝日のようにパッと輝くのだった。

やがて戦争が終り、故郷のマリウポリに帰ったリュディアがベルリンのシャルロッテンブルク駅で汽車に乗っているのを「私」は見たが、あの郷愁に泣きぬれて、脱走を繰り返していたリュディアのおもかげはどこにもなく、他の大勢の少女たちと歌を歌っていたのだ。遠ざかりゆく汽車を見送りながら、「私」は「リュディア、ごきげんよう！元気でね、リュディア」(345) と叫んだのだった。

強制連行されてきたリュディアの物語は、彼女がよく働く美しい女性だっ

たので、なおさら哀しい物語となるはずであったが、作者は最後に楽しそうに歌を歌っているリュディアをベルリンのイギリス軍政地区のシャルロッテンブルクに出現せしめ、その近くに住んでいるらしい「私」という「座標」と一瞬だけ交差させ、明るい雰囲気を感じさせて物語を終わっている。[15)]

9．Der Erstkommuniontag

『トルソ』全篇中でもっとも明るい短篇である。もちろん、背景は暗い。7歳の娘アンゲラと母親、そして国民突撃隊に編入されている父親の三人家族の住むベルリンとおぼしき町は、連日連合軍による爆撃に襲われている。ソ連軍も東方からひたひたと侵攻してきているらしい。が、この侵攻は人々によって半分は望まれているらしいことも読み取ることができる。

そのような状況の中で、今日はアンゲラの初聖体のお祝いの日であり、彼女の朝からの興奮、母親の気ぜわしさ、教会での式の様子、祝福する神父とアンゲラのやりとり、家でのお祝いの肝油で焼かれたケーキとアンゲラの反応、今日は出ないと予想していた空襲警報、そしてすさまじい爆撃の連続、それを両親に挟まれて耐えるアンゲラ、かなり被害を受けた家から助け出されたアンゲラ、そして、今日一日のアンゲラの心中を領していた台所のケーキの無事だったこと、これらすべての事物と出来事が7歳の天真爛漫なアンゲラの目を通して描かれているので、とはつまり、内面を表現する動詞はアンゲラ以外の人物にはほとんど使われていないので、ランゲッサーの作品としては珍しく読みやすいものとなっている。

「ランゲッサーが正式な結婚によってもうけた三人の娘の長女アンネッテ（1938年生まれ）の初聖体体験が、この作品の伝記的背景をなしている。

> アンネッテに今ちょうど初聖体の準備をさせているところです。―クーシェ神父は事態がどのようになるか分らないので、出きる限り早く公教要理を急ぎたいらしいです。もっとも、大きなお祝いの宴を準備することはできないでしょう。ただ、ハイニが参加できたらいいがと思っています。」[16)]

この手紙の内容の一部をランゲッサーはこの短篇の中に取り入れている。

それは、初聖体のミサに臨席している一人の婦人に隣席の人に次のように語らしめている個所である。[17)]

「ホラ、あの子は私たちがすべてを失ってしまう前に、取り急ぎ初聖体を受けさせられる子どもたちの一人よ。」(347-348)

10．Jetzt geht die Welt unter

またしてもベルリンの、老人と女子どもだけの家が舞台で、ベルリンは連日の爆撃にさらされている。「ケペニック駅は国民突撃隊がロシア人から再び奪還したのよ」(353) というセリフが登場人物の口からなされるので、ソ連軍によるベルリン陥落もいよいよ大詰めという時期である。

そんな状況下で、二日半前からその家の寝室の隅っこに一匹の鉛色の犬がどこからかやって来て、居座ることになる。空襲のさなかに家族でこの犬がどこから、何のためにやって来たかの議論が繰り広げられ、これが本短篇のすべてである。祖父が足蹴にしようが、杖で殴ろうが、犬は部屋の隅に寝そべっているばかりだ。軍隊犬だと祖父が主張すれば、家の若夫人の従妹は急援軍の犬だと言う。こんなセリフにも孤立無援のベルリンの状況が反映されている。その日の夜はふだんよりもいっそう烈しい空爆となり、皆は地下の防空壕に入る。翌朝、皆が家に入ってみると、犬はついに姿を消していた。防空壕に入る前に確かに部屋のドアは閉めて行ったのに、と皆は不思議に思う。そして、最後に従妹がこの作品の表題になっている「Jetzt geht die Weltunter.（これで世界が破滅するんだわ)」(356) と、自分自身に対してというように呟く。犬は世界が存立し続けることの象徴だったのだ。[18)]

11．Nichts Neues

この短篇もソ連軍のベルリン侵攻直後の話で、その際に「気違いたちが」シュプレー川の地下を潜るトンネルに川の水を引き入れてしまったので、地下鉄道がそこで途切れてしまい、人々は川にかかる橋を徒歩で向こう岸まで渡らねばならない。その雑踏の中で、フロックコートを着た初老の男が左側の連れの男に話して聞かせる内容を、その右側をたまたま歩くことになった

除隊となった一兵卒がとぎれとぎれに耳にし、その際、初老の男の語りと兵卒の内的独白とが交互するという、本『トルソ』にいくつか見られる構成になっている。

最初は死刑と拷問の話、続いて裁判の話、監獄の話、しかし、それにも屈しない人々の話、ありとある拷問方法の話、何が勝利で何が敗北か分らないこと、そして人間とその本姓は数千年前から同じであったこと、などが初老の男の口から語られる。そのとぎれとぎれに理解できる話から、語り手の兵卒は、あるいはブーヘンヴァルト強制収容所、あるいは「白バラ運動」のショル兄妹、あるいはポーランドの絶滅収容所アウシュヴィッツのことだと思うが、最後に兵卒が好奇心に我を忘れ、それは何のことですかと尋ねると、どうも監獄の教戒師をしてきたらしい初老の男が答えて言うには、それは百年前に朝鮮であったヨハネス・パクとアガーテ・リの殉教死のことだと、そして、天が下に何ら新しいことはない、すべてはすでに存在したと。

Ｊ．Ｐ．Ｊ．マーセンは、作者はこの作品でナチス・ドイツの出来事を歴史の中で表明された悪の一部と見ることで、それを相対化していると述べているが、筆者は作者の意図はそういう相対化にあるのではなく、単にナチスの言語に絶する悪逆な行為にも先例らしきことはあったということを示唆しているに過ぎないと思う。それよりもやはり、この聞き手である一兵卒の心を領しているナチスの非道ぶりが、むしろ浮き彫りになっているのである。[20)]

12．Glück haben

ランゲッサーは、この作品でもサナトリウムと老人ホームをかねたマルク地方のかつてのお城に、語り手の「私」が知人の男性を訪ねて、その男性を庭のベンチで待っている間に隣に座ったある女性の患者の独り言を、開封されてそこに置いてあった手紙を読むというふうに聞いてしまう、という状況設定を用いている。全体の三分の二位の分量が、この「年老いてもいず、若くもない」(361) 婦人の語る、ナチスと戦争による苛烈きわまりない人生の物語である。少々長くなるが、ナチス・ドイツに翻弄され続けた人生の典型例として、またナチス・ドイツのすべてを概観できる物語として、ここに要約する。

それは、彼女の可愛く聡明な幼年時代から始まり、第一次世界大戦までの幸福な少女時代を経て、ワイマール期にある上級公務員と結婚したが、これは戦死した若者が多かった中でクラスで5番目に早い結婚であった。可愛い子どもを二人得て、万事はおあつらえむきに進行した。優秀な夫は国家公務員に留まることも出来たのだが、早く出世してお金をもっと稼ぎたいがために、民間の法律顧問となって、一家はケルン、ハンブルク、ケーニヒスベルクへと移って行った。だんだんと北方へ、そして北東へ、ついには東プロイセンの最東部のロミンテンに土地を買って落ち着くことになる。ひょっとしたら、こんなに遠く西部を離れてきてしまったのが運の尽きだったのではないか、という想いが婦人の頭をよぎる。

事実、これ以後は不運続きで、第二次大戦直前にかなり歳をとった夫が突然理由の知れない塞栓症で死んでしまう。次いで、軍隊にとられた息子が騎士十字勲章を得たいがためにパラシュート部隊に志願し、モンテ・カッシーノ近くで戦死してしまった。ちょうど同じ頃、ポーランドから奪取した総督管区で労働奉仕のリーダーになっていた娘がさる親衛隊員に子どもを産まされて、家に戻ってきていた。孫はすくすく成長し、やがて娘はある夜間戦闘機乗りの将校と婚約したが、この男がイギリス軍の北フランス上陸直後に戦死してしまった。孫が歩き始めた頃にはもうヒットラー総統からも運が逃げ去っており、これ以降はすべてが傾いてきた。

ソ連兵が侵攻して来て、とうとう一家は厳寒の中２個のトランクのみをもって逃亡せねばならなくなった。汽車は難民で溢れ、貨物列車や家畜列車や無蓋列車も利用されたが、一家は運良くダンチッヒ近くのディルシャウからドイツ領のシュナイデミュールに行く普通の列車に乗ることができた。しかし、汽車はシュナイデミュールで止まり、負傷兵や逃亡してきた部隊を先に優先的に乗せることになり、全員いったん汽車から下ろされた。その後３人は汽車の屋根の上に上ることが出来たが、娘がトランクを取りに降りて、そのトランクは母親に手渡すことができたが、娘は反対方向の汽車にはねられて死んでしまった。汽車の屋根の上では、孫も結局は凍死してしまう。

一人ぼっちでベルリンにたどり着いた婦人は、わずかばかりの食料を求めて難民収容所を転々とし、じゃが芋が残っているという廃屋の収容所に行っ

ても、すでに貯蔵室は空っぽで、幸運にも水を張って皮をむいたじゃが芋のいっぱい詰まった木桶を見つけた。彼女はそれをリュックサックにほぼいっぱいにして、さらに木桶の底深く探ると、両手は褐色の、粘つく、臭い汚物で満たされた。これは、収容所を去る前に誰かが木桶に排出した糞便なのだった。婦人は「これで私の不運の舛はいっぱいとなった」、「何という不運な人生だろう！」（366）と何度も叫び声を上げるのだった。

以上が本来の物語であるが、語り手の「私」はちょうどその場に姿を現わした神経症を患う知人の男性ともども婦人の叫びに呼応して叫び、それを制止しようとした看護婦に三人で殴りかかったのだった。ここでも作者は「私」の内面の動きを描かず、恐らく「私」が婦人のあまりにも悲惨な人生に心から同情し、ともに叫ばざるを得なかったことが推察される。この婦人の叫び「何と不運な人生だろう！」は、短編集『トルソ』全体の叫びであり、婦人の掴んだ糞便に従来の市民世界の没落が凝縮されている。[21)]

13. Der Friede Gottes

語りの現在は1946年の夏だが、物語の現在は1945年夏のことである。その1945年夏、瓦礫の街の中をある家、ある人間を捜して回る夫婦。やっと捜し当てたその家は残っていて、夫は外出から帰ってきた男と、この男が果すべき任務について話し合う。妻はそこに眠るその男の叔父さんの読みさしている聖書の「フィリピ人への手紙」を読む。以上が出来事だけの梗概である。

この作品には特に暗示的方法が多用されていて、解釈に窮する個所が多い。例えば、夫婦が探し当てた男の「任務」の内容が判然としないし、男からもらった手紙をハンブルクへ帰る途中で夫が投げすてるだろうと、妻が推測しているが、それが何の手紙で、なぜ投げ捨てるのかも解らない。妻の視点では、夫は男からお金、マーガリン等の配給券、煙草などをもらえるかどうかと心配しているが、当時のドイツにおける食糧事情の悪さはよく知られているので、これは理解できる。煙草は特に、闇市でバーター取引きの材料として効力を発揮したそうなので、煙草を入手することは死活問題だった。[22)]

「フィリッピ人への手紙」の当該個所は第４章第７節で、「そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和があなたがたの心と考えとを、キリスト・イ

エスによって守るでしょう」[23] というのであるが、終戦直後の生活苦にあえぐ一組の夫婦が、必死に生活の糧を捜し回る様子とその心境を描いた末に聖書のこの個所で締めくくっているところに、ランゲッサーのキリスト者としての意図が表われている。[24]

14. Die gtreue Antigone

無名兵士の墓に恋人と詣でる主人公の娘カローラに、この恋人は、その墓はナチ親衛隊兵士の墓かもしれないではないかと娘をなじるが、カローラはそれがオーストリアのマウトハウゼン強制収容所で殺害されたらしい兄クレメンスの墓だと見なして、いつも墓参りに来ていたのだった。

ソフォクレスの悲劇によれば、テーバイ王オイディプスの娘アンティゴネーは、アルゴスの七将に攻められて戦死した兄弟のポリュネイケースの遺骸を葬ることをクレオーンに禁じられたが、その禁を犯して葬礼を行って捕らえられ、地下の墓場に生きながら葬られる。ランゲッサーのこの作品は、「忠実なアンティゴネー」という文学上のモデルに倣って、その外的事象としての葬礼のモチーフとアンティゴネーの忠実な心性とを骨格として用い、恋人役の若い男にクレオーンの息子ハイモーンの役割を演じさせている。ソフォクレスの場合は、アンティゴネーは殺され、新婚のハイモーンはその後を追って自刃するのだが、この作品では、見ず知らずの人の墓を兄の墓だと見なして詣でる娘の行いの馬鹿らしさをなじる気持ちと、兄に忠誠をつくす娘の心根への妬心とから娘を邪険に扱っていた恋人が、最後には娘の素直な心性に融和させられて、心を開いていく。恋人の心が柔らかく溶融していくきっかけとして、次の黄蝶の描写が象徴的に末尾に提示されている。

> Sie stockte. Dicht vor beiden flog ein Zitronenfalter mit probenden Flügelschlägen vorbei und ließ sich vertrauensvoll und erschöpft auf dem Korb mit Pflänzchen nieder.（376）

このように、この作品の時代背景は戦中か戦後か判然としないが、アンティゴネーに擬えられた娘カローラと頑なな恋人との気持ちの絡み合いを、作者

は象徴的手法を用いて巧みに写しえているのである。[25)]

15．Kuckuck

森の近くに住む中年とおぼしき夫婦。夫は戦争で片足を失い、新しい義肢が出来るのを心待ちにしている。妻はそんな夫と結婚したものの、後悔しているらしく、過去に幾人かの男性と出会った思い出を忘れられない。二人は夜中に雌を呼んでいるらしいカッコウの鳴き声に目覚め、夫はいつ自分が立派な義肢を入手できるかと考え、その年数としてカッコウの鳴き音の数を数え始める。妻も同時に数え始めるが、その数は不具の夫の倍の数だけ先んじてしまう。夫が10回数える間に妻は20回数えるが、この数は妻の心中では象徴的に20年間の自分の過去を辿る行程となり、夫の心中では自分が良い義肢をもらう10年先の未来への行程を意味することになる。このほとんど一世代といってもいい30年の間隔が夫と妻の間を隔てている。

しかし、二人が飛び去ってしまったと思っていたカッコウがまた還ってきて、ついに雄は雌と一緒になったらしく、雄のカッコウはもう一度最後の鳴き声を発する。そのとき、部屋の中で夫の松葉杖が床にガタンと倒れる。すぐにそれを拾おうとする妻を制し、夫はこれを良い義肢を入手できる兆候だと言う。一緒になったカッコウの雄と雌、床に倒れた松葉杖、これらを象徴的契機として二人の心は融和する。

大戦間のワイマール期に婚期を逸した女性が、松葉杖で現れた男と不満足な結婚をし、その夫は夫で良い義肢だけに希望を抱かざるをえない負い目を負った男の悲哀を感じている。これも時代に強く条件づけられた人間の辛い生の一面を描いている。

16．Vorage auf Reisen

労働徴発されて、ベルリンのテーゲル地区の果樹園で強制労働させられている二人のフランス兵の捕虜が、サクランボの実を収穫している。その際の二人のかけあい的会話が、この作品のすべてを占めている。会話の中心は、一方が語る、表題の一部にもなっているヴォラージュという名のさるフランス人神父の破天荒な物語で、彼はフランス精神の核とも言える理性、進歩、

技術の権化のような人物という設定である。彼の神父としての仕事である魂の導きにおける合言葉は、「idiotensicher（馬鹿ちょんの）」（385）で、人間の心の導きを事物の世界における操作の簡便性の追及と同レベルのもとに還元しようとする。神父は第二次大戦中に、役目の終わった輸送用の飛行機の機体に四輪をつけて、30人は収容できる巨大な自動車として、つまりは動くチャペルとして用いるという前代未聞の人物である。

この作品は18篇の短篇の中でも、神父の創作物同様に異色のもので、フランス精神の一つの核とも言われている「ユーモア」が重要なモチーフをなしている。まず、これはベルリンに戦争を挟んで20年近くも住んだランゲッサーの気持ちが反映していると言えるが、二人のフランス人捕虜が軽妙な会話のやりとりを交わしながら、ドイツ人、特にベルリンの人間のユーモアのなさを云々する。また、二人の間でもノルマンディー出身のフェルナンが、モンペリエ出身のエティエンヌに向かってユーモアがないと言う。そして、ユーモアの極地ともいうべきヴォラージュ神父の動く礼拝堂の物語が展開されるのである。語り手は局外の中立的立場を維持しながら、中心となる話を語るフェルナンに寄り添っているようである。

ランゲッサーは、捕虜の強制労働という戦時下特有の現象を素材として、フランス合理主義精神を戯画化しつつ、同時にドイツ人のユーモアのなさを皮肉っている。

17. Hier war die Zeit vorbei

語り手の「私」が、アブサロムという旧約聖書のダヴィデの息子に由来するあだ名の友人の誘いに乗って、コンクリートとガラス張りで出来たある高層建築の役所に、そこで働く速記タイピストを見るために一緒に出かけていく。6階の廊下に置かれた長椅子に座って、「私」はアブサロムのその女友達との愚痴話を聞きながら、件のタイピストや窓外の眺望に目を向けたりしていると、突然、激しい衝撃のようなものが「私」を襲ったとみるや、両側を二人の女性に担われた偶像のような不思議なものが廊下をこちらに進んでくる。よく見ると、干乾びた腕をもった百歳位の老婆であった。筆舌に尽くし難いショックを受けた「私」は、こんなことはあり得ない、と呟く。そし

て、この偶像とそれを担う二人の女性からなる「建造物」は完璧に仕上がっていて、これより良いものも美しいものもなく、もはや計測することも変更することも不可能で、日時計でも砂時計でもなく、「ここではただ時そのものが通り過ぎたのだ」(390) と「私」は思うのである。

「私」の見たこの光景ははたして現実のものか、あるいは幻想なのか読者には判別がつかないように、この中心となるイメージは描かれている。干乾びた偶像の老婆は、言わば「時」そのものの象徴として呈示されている。そして、一般的な形で戦争への言及はあるが、背景となる時間と空間が明瞭に示されていない。異様な短篇である。[28)]

18. Im Einklang

いつか自分は処刑されると、1922年に信じ込んだ「私」が精神科の医者に向かって話している、という構成である。全篇この「私」の独白的語りで終始している。

1922年という年を概観してみると、ラーテナウが外相に就任し、6月24日に暗殺される。各地で労働者のストが頻発する。かたや、ヒットラーもミュンヒェンのビアホールでたびたび演説し、暗躍する。ラーテナウ暗殺を機にマルク相場が下落する。11月にフランスがルール地方の占領を通告する。そして、翌23年にはルール占領が実行され、ハイパーインフレーションに突入していく。かくも暗い世相である。

しかし、「私」はあるとき窓の外を通る羊の群れのひづめの音が聞こえ、それとともに一人の老人の息遣いが聞こえ、自分がそれと一体になっていると感じ、安息を得るようになる。それ以来、「私」は結婚、息子の誕生、社会主義者の夫とその活動に同調する自分という、1922年から33年までのもっとも良かった生活を経験した。しかし、それから以後は嘘が始まった。ほとんどの同僚が変節したが、理想主義者の夫は否と言った。彼は、まず解雇され、スパイされ、身の破滅をもたらすような手紙のやり取りなどで摘発され、監獄から強制収容所に送られ、反逆罪で訴えられた。その後は「私」が夫の跡を継いで、非合法活動を続け、「私」も嘘をつくようになった。息子がちょうどスターリングラード攻囲戦で戦死した頃、「私」もパクられ、夫も獄中

で死んだ。「私」は幸いにもうっかりミスかどうかは判らないが、釈放されてしまった。

戦争が終わって生活はうまく運びそうだったが、もはや例の一体感が消失しており、すべてに不安を感ずるようになった。そんなとき、突然また羊の群れの通り過ぎる音が聞こえ、この「私」の部屋ばかりか、「私」の胸、「私」の全人生を満たしているあの「老人」と一体になっているという感じが訪れるようになったのだ。「先生、真夏の最中に私と一緒に呼吸しているこの老人は、一体誰なのでしょうか。それは人生でしょうか、運命、もしくは私自身なのでしょうか。」(395) と「私」が医者に問うて、この作品は終わる。

この幻聴として表われている羊群のひづめの音と一人の老人の息遣い、そしてそれと一体となっている自分を感じて、安心を得る「私」の、ナチス・ドイツに翻弄され続けた人生を描くことに、この作品の主眼があったのだろうが、そういう辛酸を嘗め尽くした人生に時折そっと訪れる神的存在も暗示したかったのだろう。[29)]

19. Das gibt es

この作品もベルリン空襲が激しい1944年３月頃の、ランゲッサーの実際の体験に基づいている。作品の舞台となっているニーダーラウジッツ地方のノイツェレという町は、ランゲッサーが子どもたちの疎開先として見出した、現ポーランドと国境を接するオーダー河畔の小さな町である。[30)]

物語は、このノイツェレで太陽が自分を軸にして3回転半し、それから急にその輝きを失うという超自然現象が見られたという報告がなされたが、それは実際にあったことかどうかを巡っての三組の住民たちの話である。

この超自然現象は、1944年８月最後の日の18時35分に起こった。一組目として、ノイツェレにあるナチスのエリート養成機関「国民政治教育機関」、通称「ナーポラ」の教師クルトが見た話として、「歓喜力行団」の秘書で彼に恋しているメンテが語り手の「私」に語ってくれたのである。その話によると、クルトは自分は総統の家来として結局は総統がこの現象になんと言われるだろう、これは結局はあのＶ１、Ｖ２という「報復兵器」を用いた新たな試みだったのかと、言ったということである。

二組目は、旅籠と養魚池を経営し、いくらかの田畑を所有している太っちょのモイリッヒ氏の所に労働徴用されてきた「辛らつなポーランド女」のヴァンダが、モイリッヒ氏が自分で見たこの現象について恐怖で声を詰まらせながら語った様子を「私」に話してくれたのだった。モイリッヒ氏はソ連軍がこの町に侵攻してきたときに、逃げ出してしまったのだが。

この作品の最後に置かれて、作者のキリスト者としての思想を体現していると思われる三番目のエピソードは、ノイツェレの大きな孤児院を経営するカトリックの修道女たちによって担われている。修道院長の話として「私」にこの件を語ってくれるのは、家畜小屋係の修道女エメレンティアであった。従順な彼女は「ひよこ」たちの世話をしながら、「そんなことはこの頃ではあちこちで耳にしますよ。」と答えて、「エルサレムよ、ああエルサレムよ…」(400) と言葉を継いだ。これはマタイ福音書第23章37～39節で、イエスがエルサレムに擬人的に語りかける場面である。

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる。言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決してわたしを見ることがない。」[31)]

これはイエスがエルサレムの滅亡、ひいては世界の没落を弟子たちに予言する個所で、作者は、めん鳥である自分がひよこに擬えられた人々を改心させようとしたイエスの努力に、修道女エメレンティアの日々の営為を重ね合わせている。エメレンティアはソ連軍が侵攻してきても町に留まって、家畜の世話をし続けたのであった。

この作品も、ナチのエリート養成機関「ナーポラ」、労働組合に代わる労働戦線の娯楽組織「歓喜力行団」、幻の新兵器「Ｖ１、Ｖ２」のこと、ならびに労働徴用されたポーランド人といったナチス・ドイツを即座に表象させる記号をちりばめて、この時代を彷彿とさせる狙いもあるのだろうが、ラン

ゲッサーの眼目はやはり最後に登場する修道女エメレンティアの営為をイエスに重ね合わせることで、不安な時代に動揺しない生き方を呈示することだった。[32)]

20. Früchte Gott

『トルソ』の掉尾を飾る詩「神を懼れよ」では、神を懼れる者は最後の審判を喜びをもって迎えることができるという内容の詩句で締めくくられている。これは、最後の短篇『Das gibt es』の末尾に置かれた修道女エメレンティアの物語に直結している。[33)]

おわりに

以上、本短篇集『トルソ』の18の短篇と2つの詩を詳細に解読し、考察してきた。確かに『トルソ』にはランゲッサー言うところの「すべてが、つまり、恐怖が、驚愕が、狂気が、グロテスクが」、小さな女の子の「無邪気さが」、そして若い娘の「忠誠心と優しさが」あった。しかし、『トルソ』が「編年体的」、「論理的」構成ではなく、「音楽的」構成をもっているという作者の意図については、それが達成されているかどうかの判断を下すのは困難だ。そもそも「音楽的」構成をどのように解するかが問題である。戦後の人間のトルソ的状態を描いた「Der Torso」、戦争の序曲を表象させる「Das Stilleben」、反ユダヤ主義の顕在化を見事に表現した「Saisonbeginn」という冒頭の三篇の作品をもって、例えば音楽で言うソナタ形式の主題の提示と解することもできるかもしれない。しかし、後に続く15篇の作品を展開とか再現とかいう音楽用語で解釈することが可能だとは考えられないのだ。

とはいえ、この短篇集『トルソ』の中には、戦争への序曲、空襲、疎開、強制労働、ソ連軍の侵攻、東方占領地からの逃亡、反ユダヤ主義の日常化と猛威をふるうホロコースト、終戦直後の瓦礫の街とそこを彷徨う人々、といったナチス・ドイツの悲劇の状況のすべてが統一的な視点で描かれているのである。統一的な視点とは、すなわち、この短篇集が神の最後の審判の宣言で開始され、ナチス・ドイツのあらゆる悲惨が描出された後で、神を懼れる者は最後の審判を喜びを持って迎えられるという、少なくとも作者が依拠して

きたキリスト教的思想に貫かれているからである。

（注）

※　短篇集『トルソ』のドイツ語テキストは、次のものを用いた。
Langgässer,Elisabeth:Erzählungen in Gesammelten Werken Hamburg（Claassen Verlag）1964.

なお、１から20までの番号を付した本文の論述に対する本テキストの該当ページについては、それぞの論述の末尾に注を付した。ただし、テキストの直接引用は、その引用部分の末尾にページ数を表わす数字を（　）に入れて示した。

1．Langgässer, Elisabeth: Das unauslöschliche Siegel. Roman, Hamburg（Claassen & Goverts）1946.
2．Langgässer, E.: Der Torso. Hamburg（Claassen & Goverts）, 1947.
3．Langgässer, E.: Briefe 1924-1950. Hrsg. von Elisabeth Hoffmann. Düsseldorf（Claassen Verlag）1990, Bd.1 Nr.281, S.555.
4．Ibid., S.555.
5．Ibid., S.555.
6．Langgässer, E.:Briefe 1924-1950. Bd.2, Nr.304, S.614.
7．Langgässer, E.: Erzählungen. S.312-313.
8．Ibid., S.314-318.
9．Ibid., S.318-320.
10．Ibid., S.320-323.
11．Ibid. S.323-330.
12．Ibid., S.330-335.
13．Ibid., S.336-341.
14．成瀬・山田・木村篇：世界歴史体系　ドイツ史３（山川出版社）1997年第１刷、297頁参照。
16．Langgässer, E.: Briefe 1924-1950. Bd.1, Nr.257, S.496.
17．Langgässer, E.: Erzählungen. S.345-352.
18．Ibid., S.352-356.
19．J.M.J.Maassen: Die Schrecken der Tiefe. Untersuchungen zu Elisabeth Langgässers Erzählungen. Universitaire Pers Leiden 1973, S.100.
20．Langgässer, E.: Erzählungen. S.357-360.
21．Ibid., S.361-367.
22．クリストフ・クリスマン（石田・木戸訳）：戦後ドイツ史　1945―1955、二重の建国（未来社）2007 第２刷、55-59頁参照。
23．聖書　新共同訳：財団法人日本聖書協会訳、1988.
24．Langgässer, E.: Erzählungen. S.367-371.
25．Ibid., S.371-376.
26．Ibid., S.376-381.
27．Ibid., S.381-386.
28．Ibid., D.386-390.
29．Ibid., S.391-395.
30．Langgässer, E.: Briefe, Bd.1, Nr.235, S.449-450.

31．聖書：前掲書　マタイ福音書第23章37-39。
32．Langgässer, E.: Erzählungen. S.395-400.
33．Ibid., S.401-402.